

浄土

1989-1

昭和二十四年四月二十八日（愛媛県 特別授承認雑誌）第三二五号
昭和六十三年十二月二十五日印刷 昭和六十四年一月一日発行
第五十五卷 正月号



浄土門主 藤井実応

清風明月



知恩院門主 明應寺大座



|| 正月号 ||



かの仏の寿命およびその人民無量無
辺阿僧祇劫なり。

——『阿彌陀經』

目 次

新 春 法 話

正月に仏を見る……………竹 中 信 常……(2)

<ずいそう…「つくづく法師抄」>

修正発願……………眞 野 孝 信……(8)

巳年史談……………細 田 隆 善……(14)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <22>

海と山の狭間で

……………木 下 隆 一 ……(25)

——我が思い出に住む犬たち(8)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(1)

……………松 浦 行 真……(32)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

(新)
(春)
(法)
(話)

正月に仏を見る

たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学名誉教授・文博)

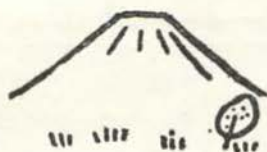
一

正月とは一年の初めであり、何ごとがあつたにしても心を新たにしてくべきであらう。だが、そんなに肩肘張らずとも、浄土宗のものとして正月をそれなりに考えることも必要ではなからうか。

一休禅師の歌に、

正月や冥土の旅の一里塚

めでたくもありめでたくもなし



とあるが、わたしたち浄土宗のものにとって「正月」は、「めでたくもあり、めでたくもなし」なのである。

めでたくない方では、今から七十七年前の建暦二年正年二十五日、宗祖法然上人が八十歳でおなくなりになったことである。亡くなる二日前の二十三日、今日も浄土宗では何よりも大切な教えとして日々お唱えしている『一枚起請文』を、病いの床から起きあがられて書き遺されたことはよく知られているところである。

念仏が大嫌いだった日蓮聖人でさえ、当時は「日本六十余州、念仏の声に埋まれり」といったほど、法然上人の念仏の教えが弘まったのだが、これに対して当然多くの非難、反撥があった。そのために建永二年（一二〇七）念仏反対の急先峰の比叡山や興福寺の僧徒が朝廷に対して訴えていた「念仏停止」の奏上が効を奏して「念仏禁止」の宣下があり、法然上人は土佐に、親鸞聖人は越後に流されることになった。流罪を免れるには念仏の教えを説くことを控える以外には道がないというので、弟子の信空が代表してお願いしたところ、

「流刑に会うことは決して恨みではない。むしろこの機会に、今まで直接に会えなかった地方の人々に念仏をすすめることが出来る。ありがたいことである」と仰言った。西阿という弟子がさらにお止めすると、

「われたとえ死刑におこなわるとも、このこと（念仏の教え）いわずばあるべからず」

決然とこうお答えになったのである。そして同年三月京都を出発し、瀬戸内海を船で摂津の経の島（神戸市兵庫）播磨の高砂（高砂市）室の津（兵庫県揖保郡御津町）、そして三月二十六日塩飽島（香川県丸亀市本島町）さらに夏に至って讃岐の小松庄（高松市仏生山町）におちつかれた。その途々、遊女・漁夫・農民などに念仏の教えを弘められた。今日でも七十五歳といえ、わが身に引きかえて、とてもこのような大勇猛心や持って、念仏の教えを弘めるために、海路遙かに旅することは並大抵ではない。物見遊山で新幹線やジェット機で行くのならまだしも、正確にいえば七八二年の昔、敢然として遠地に赴^{おもむ}かれたことには、ただただ頭がさがるのみである。

幸いにして同年の内に赦免の勅宣が下りて帰路に着かれたが、京洛に入ることとは許されず、摂津の勝尾寺二階堂に入られ、亡くなる前年の秋までここに止住された。七十九歳の秋になってやっと京都に入ること許されて、現在の知恩院の一隅元黒谷の小庵に帰ることが出来たのであるが、老齢の上に遠路の流罪と勝尾寺の仮りずまいの不自由さとで、さすがの法然上人も老齢と心労から病いにかかられたのである。折角、帰ることの出来たのに、僅か一カ月余で、「われもと極楽より来たれるものなれば、定んで帰り行かん」といい残されて、八十歳の生涯を閉じられたのが、京都に帰られた翌年の正月二十五日だったのである。

「めでたい」方の正月は、それより以前の上人六十六歳の頃のことである。上人の伝記『勅修御伝』第七に次のように書かれている。

「上人専修正行としをかさね、一心専念功つもり給いしかば、遂に口称三昧を^せ発し給いて、生来六十六、建久九年（一一九八）正月七日の別時念仏の間、始めには先づ明相あらわれ、次に水想影現し、のちに瑠璃の地少しく現前す。同二月に宝地宝池宝楼を見たまう。それよりのち連々に勝相あり」

法然上人は称名念仏の正しい行を積み、一心不乱に念仏を唱えられた。その功德が積り念仏を唱えている内に心が静まり、不動の状態となつて思わぬ不思議の境地に達せられた。上人六十六歳、建久九年正月一日、一週間の時間をきめて念仏を唱えていた時のことである。第一目は、念仏を唱えているとあたりが煌々と明るくなった。第二日目には、極楽にある美しい七宝の池に満々とたたえられた水の姿がありありと現れてきた。また瑠璃の大地が見えてきた。第六日、別時念仏の終りの夜、瑠璃の大地に荘麗な宮殿の建っているのが見えた。正月もすぎ、二月に入つて早々に瑠璃の大地が現出した。こうして正月元旦から二月十日に至る三十七日間、さまざまな極楽のありさまが念仏三昧の中にあらわれた。「これは私が常日頃、日に六万遍の念仏を心がけ、怠ることなくつとめた結果、このような妙相（ありがたいありさま）が現われたのだらう」と仰言っている。そしてこの状態が何カ月か続いて、最後には眼前に勢至菩薩が、そしてさらには阿弥陀仏の尊像が現われるようになった。

このように、念仏中にさまざまな奇瑞を感得することを「三昧発得」といい、法然上人はご自分の体験を『三昧発得記』と題して書きのこしておられる。しかし、生前は誰にも知らせず秘しておいになった。そして正月二十五日、御臨終の時、門弟へ、

「……およその十余年よりこのかた、念仏の功つもりて、極楽の莊嚴及仏菩薩の真身をおがみたてまつることつねのこと也。しかれども年頃は秘していわず、いま最後にぞめり。かるが故に示すところ也」

といいのこされた。後日、常日頃おそばに仕えていた勢観房源智が上人ののこされた文書を整理したところ、果して上人の遺言通り『三昧発得記』を見出したのである。

なぜ上人は御自分の貴重な体験を生前秘して他に洩らさなかったのか。それには宗義の上からいろいろむづかしいわけがあつてのことだが、簡単にいうと、浄土宗の念仏は阿彌陀仏が建てられた四十八の本願の中、第十八番目の願

「もしわれ仏を得たらんに（成仏できたら）十方の衆生、至心に信樂してわが国に生れんと欲し、乃至十念せんにもし生ぜずんば正覺を取らじ」

わたしが仏となったならば、人々がわたしの建てた極楽浄土に往生したいと、まごころこめて信じ、念仏を一声もしくは十遍唱えて、それで往生できぬとならば、わたしは仏にはならないであろう。……といわれたことを信じて申す念仏なのである。

だから、例えば、金持ちになりたいとか、病気がなおりたいとか、楽になりたいなどと思つて唱える念仏ではないのである。したがまた、三昧を発得しようとか、仏や極楽のあ

りさまを見ようと思って唱えるのではない。そういうことは一切ぬきにして、ただひたすらに阿弥陀仏の本願を信じ、往生極楽を願って念仏の唱えるのである。そうするとそのような願いもいつのまにか消え去って、何か知らぬが、自然に念仏が心の底から湧き上ってくるようになる。念仏を唱えることがありがたくて仕様のない心になり、思わず躍り出したいほど嬉しくなるのである。經典では「歡喜踊躍の念仏」といつている。自分が念仏するのでなく、仏が念仏する。さらには一遍上人のいわれたように、

念仏が念仏する

ようになるのである。こうした状況こそ三昧発得なのであり、ここに至って、仏・菩薩がその姿をあらわして下さるのである。

だから「見仏」は念仏三昧の結果、自然に現われるのであり、始めから見仏しようとするのではない。ところが一般の凡人は念仏すると何か良いことがあると思いがちである。原因と結果を逆に考えているからである。

法然上人がご自分の体験を秘して語られなかったのも一般の人々の誤解を恐れたからにほかならない。

浄土宗のものにとって、正月は悲しい月であると共に、それ以上に、宗祖が尊い体験を得られた、喜ばしい月でもあるのである。

◇◇すいそう……「つくづく法師抄」◇◇

修しゆ 正しょう 発はつ 願がん



歳首、元旦のあらたまりは、年序の改更より、寧ろ人の心の厳肅さが、人間生活に大きな区切りつける画期として、正月とか元日と申すに相応しい。

元旦は歳旦を意味し、初朝はつあさとし、初日の出やその陽光を初日影と云い、初若水や初詣を

眞まの 野の 孝こう 信しん

(八幡市正法寺住職)

はじめ、初夢、初湯、初硯、初会、初釜、初化粧、或は初荷、初市、初商あたま、初出勤等々、真新しい布に剪刀はさみを入れて裁断する「初」(シヨ・ソ) (はじめ・はつ・うい・そめる) の字『衣編へんに刀を旁つくりとする』をその頭におくと、人の心も身も、更には事や物にまで清新さが

加わって、謹みの中に、慶喜よろこびの意がほのぼのと湧き出て、「今年こそは、……。どうぞ、……」の発願となり、積極的な誓願ともなり、神仏の加護を乞う祈念となつて、老若男女、人それぞれの真摯な自己の実人生への探究は、自己の信念とともに、その道標みちしるべを宗教的的人生観に求めざるを得なくなつてくる。とりわけ、科学的産物の精密な機器が人間とその社会生活をリードする昨今にあつては、稍ともすれば人間性の軽視とその喪失さうしつさえも云々され、確かな人生の依り所を求めずにはおれないのは必然の結果である。

神や仏など、超越的絶対的に聖なるものを信じ、その教示を信仰奉行して、安らぎと幸せを念じ、併せて厄難防除の加祐たすけ（たすけをこゝむること）を請願するのは、素直は人情であり、古来よりの伝承儀礼としても年頭行事として尊いものである。

茲こゝに、人間の宗教・社会の宗教として、釈尊の覚悟きやくごの上から、大衆を差別なく救うに可能な宣説せんせつとしての大乗仏教に随順ずいじゆん（すなおにしたがう）して、導かれ往く人生こそ、誰もが人生の真実義に覚めることが出来て、長寿の時代に生きる幸せを感謝しつつ、所詮は無常の中 of 束の間を、而も、唯一度きりのせつかくの人生を有意に生き遂げる方途が、次第に開かれてくるのは有難い法縁である。

安らぎと希望をもつて、常精進じやうしやうじんする求道の信仰生活の毎日が、願成の徳果とくくわ（願いが成就した功德のたまもの）を悦予えつよ（得たる心地のさきよろこび）される感謝の日暮しとなり、己すに入信の人は、益々その道において実践の累積される成果としての道業だうごふ（仏道の修行のみもの）が増上し、真の生き甲斐を満足し得る人となる。

天地宇宙の大自然界に、受け難き人身を受け、更に一切衆生済度のために建てられた仏

の誓願である「大悲の本願」に遇い、そのおかげを蒙って、往生浄土の素懷を遂げんとする私達にとつては、年序改まる毎に証悟（きとう）を証知することの近づくを悦び、歳月更なる毎に、増々浄業（きよぎみわざ）の「往生浄土の正行としての念仏生活」の策修（さくしゆ）（心を策進して善法を行うこと）に励ませていただき、努めて身・口（語）・意の三業清浄に、丹誠を凝し、一心に掌を合せ、無量寿如来の宝号「南無阿弥陀仏」を称えて、相共に慶喜の意を表し、如来に帰命し奉るのが修正の心得である。

浄土宗の寺院においては、宗定（宗としてのきまり）にもとづいて、厳肅に、

「祝聖ノ文」（本尊前）

天下和順　日月清明　風雨以時
災厲不起　国富民安　兵才無用
崇徳興仁　務修二礼　讓一

（大意） 天下やわらぎ、時候おだやかに、日月ともに清くかがやいて、風雨は共に時を得、災厲（災難や疫疾）のおこることなく、国は物心ともに豊かにして、兵士や武器も無用になつて、人々は互いに徳をあげあがつて、仁（おもいやり）をおこし、礼節をもつて譲り合い、敬上慈下の道が自然に行われる。

との偈文を唱えて、「修正の疏」（修正の意義を釈した文章）を宣し、

「請ニ護念ニ偈」（内仏前）

哀愍覆護我

令ニ法種増上

此世及後生

願仏常摂受

（大意） どうぞ、我を哀んでお護りをこうむらしめ、仏法のおかげがいよいよさかんにいただけ、此世及び後世の現当二世にかけて、請い願くば常に仏の大明明の中におさめとり、護り育て給わりますように。

更に、

「普濟偈」(諸堂にて)

神力演二大光一

普照無際土一

消除三苦冥一

廣濟衆厄難一

(大意) 仏徳に由来する威神力は、大光明を放つて隅なく一切処を照し、苦苦——身の疾病、寒熱饑渴等の苦縁によって生ずる苦。壞苦——樂事樂境の破壊によって生ずる苦。行苦——無常の流転によって感ずる苦で、行は遷流(うつりかわり)の意。等の三苦の冥(くらさ)を消除して、広く衆生にふりかかる災厄や難儀をおすくい下さい。等の偈文をそれぞれの宝前に唱えて、年頭の勤行(おつとめ)を畢り、寺族一同が祝膳に着くのである。

どの家庭にあっても、平素は情性に流れる朝の挨拶も、元朝の祝膳で、独りひとりが互

いに交す祝言挨拶とその更まつた清純な姿に、老若とりわけ幼童の上にも、一家団樂の中に、独生独來の人格を覚える。

「今年も、みんな元氣に、しっかり頑張ろうぞ。」

人はみな、このようにして修正発願の人生を積みかさねながら、寸前分たぬ無常の世を生きるのである。

昔から「一年の計は元旦に在り」と云われ、その語源に異説はあるが、その歳の首月(かしら月)として、その端正さから一月を端月・正月とし、或は人々が新年に当り、親戚、友人、知己等、公私にわたり年賀状を交換し、或は訪問して、平素の御無沙汰を詫び、交誼相変りませずと、親睦の情を互いに披瀝する儀礼や行事の多いことから睦月と呼び、その他、孟春、肇歳等々それぞれの字義をもつてする陰暦の称呼があつて、そこには、超理性

的に、情緒や自然を重視する主情的乃至理想的な渋味とその把握とも云うべきロマンがあらって、ゆかしさを覚える。何れにしても、その人の修正気分が清澄殊勝な願のあることが貴い。

年頭に当り、私達は誰しも「修正発願」する心情の貴さを、主として祝賀と慶喜をその底流として概観したが、その基盤をなす大自らの広大無量の恩恵と祖霊の遺徳を拜むことを忘れては、樹木の枝葉を愛でてその根幹を忘却し、成育の要素を無視するに似て、せつかくの願心も、身勝手な願望にすぎず、我欲満足の煩惱賊に穢され、清浄をもつてすれば無礙の妙用を発す六根（眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官）も、不浄の為に罪過の業因となつて汚濁の罪情を誘ふこともあり得るのである。

正月行事の中で、古来より重要な意義をも

つものは、歳神を祭り、祖霊を崇拜し穀物の恩沢を感謝して、生命の根源と養育成長の恵与に思いを致して、その精霊を拜むことで、神社仏閣に参拝する初詣は、この由来の根元を踏まえての発願であることが望まれる。

私達仏教徒、特に弥陀一仏に帰仰する浄土内の仏徒として、前説の趣旨をもつて修正するも、西方願王阿弥陀仏等一切三宝の広大慈恩を回願し、仏名南無阿弥陀仏十称の中に、名体不二の阿弥陀如来に撰せられて、祖師も先徳も先祖も同信同行の先達も、現前し給い、念仏同唱して、必得往生の予言を受記するは最も有難いことである。

称仏の声する処、常に諸仏の護念を蒙り、魔障近づき難く、延年転寿の益あり、転重軽受の慈光に浴す日暮しに、自他法界同利益、共生極樂成仏道の歩みを至禱して、修正発願とする。南無阿弥陀仏。

|| 新 刊 ||

安居香山 || 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ B5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒二〇二 東京都千代田区隼町三一二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端
の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れ
である。

それは、漢代の時代思想を代表
し、それ以後の中国思想にも深
く根をおろしているのである。

巳年史談

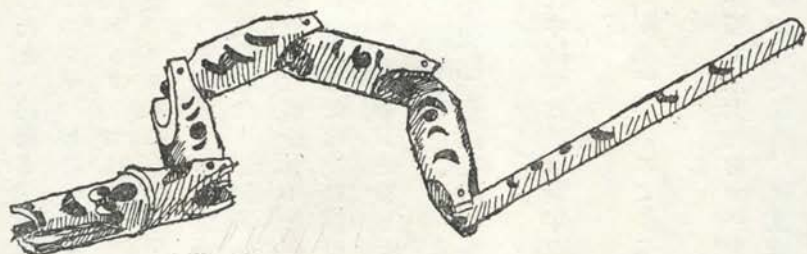


細田隆善

(東京・江東区勢至院住職
俳号・豊明)

平成元年は、干支が己巳であるので巳年という。巳は十二支にあてると動物の蛇である。巳は時間の上から午前十時をいい、また午前九時から十一時までの二時間をいう。方角では東南東をさす。本年は西暦一九八九年、仏誕暦では二五五五年、あと十一年で二十一世紀になり、大正以来七十八年、明治以来百二十一年である。

蛇は有鱗目ベヒ亜目に属し、四肢の退化した爬虫類、その起源はトカゲ類を祖先とし、ジュラ紀に



——郷土玩具、竹の蛇
(神奈川県大山) ——

Ⅱ 付記、表題カットは古代インドの性愛の神である雌雄の
蛇神を形とったものである。



——古代エジプト、ウト女神(蛇神)——

分化したといわれる。蛇は極地を除く全世界に分布し、その種類は二千五百種類を越え、その最大なものはニシキヘビの十メートルに達するものがある。

古代エジプトでは蛇の神ウト女神は王権の守護神とちれ、ツタンカーメン王（紀元前一三六〇年頃）の黄金のマスクに蛇が守護神として眉間に飾られており、歴代諸国の王冠に蛇が飾られている。古代エジプトの象形文字であるヒエグリフは紀元前三千年頃から使用され、蛇の形の字はジュと発音し、角のある毒蛇はフと発音し、この古代絵文字は百六十年前から全て解説されるようになった。

巳の文字は蛇全体の形から出来た象形文字である。蛇の文字は它が原字、蛇がとぐるを巻いて尾を垂れた形、または蛇の顔の形から出来た象形文字である。中国の史記の三皇紀によると中国古代の最初の皇帝、伏羲氏と女媧氏は人首蛇身であったという。蛇は金運に恵まれるという。

〔川柳〕金運を心待ちする蛇の夢

弥生

また中国では蛇は豊年の神ともいわれてきた。日本も同じような民間信仰がある。

〔川柳〕神様のように出て来る宮の蛇

あば世

わが国では大蛇をオロチ、小蛇をヘミ、ヘビ、クチナワと称した。クチナワは蛇が朽った縄のようであるからである。縄文土器の紋様に蛇身装飾が多くみられる。

蛇にまつわる最古の話は、古事記の初めの部分に出てくる須佐之男命の大蛇退治の話である。命は粗暴なふるまいから高天原を追われて出雲（島根県）の地に住んだ。命は肥の河（現在の斐伊川）の上流から箸が流れてきたので人が住んでいることを知り、上流を尋ねた。老夫婦が娘を中にして泣いているのを発見した。娘が八人いたが毎年、八つの首のある八俣の大蛇が来て、娘一人づつ連れてゆき今年も最後の娘を連れ去る頃であるという。命は老夫婦に八つの酒樽に強い酒を入れて待っていた。やがて大蛇が来て八つの頭を八つの酒樽につけ、飲みほして酔いつぶれ、寝てしまった。そのとき命は長剣で大蛇を切りきざんだ、すると尾の方から立派な長剣が出て来たのである。これが天叢雲剣であり、のちの草薙の剣であって、皇位継承の三種の神器の一つである。その後熱田神宮（名古屋市）に祀られてきたのである。命は救った娘、櫛名田姫と出雲で新居を構え結婚したのである。そのときの次の歌がわが国で最も古い歌として記されている。

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに
八重垣作るその八重垣を

出雲の地に妻を住ませることになった場所に瑞雲が蔽い垣根によこになって守っている意味である。その土地は松江市の近くの八重垣神社であるという。命の六代目が大国主命である。

万葉集以前の歌を上代歌謡というが、その中の肥前国風土記に蛇にまつわる短歌と話がある。

篠原しのはらの弟姫おとひめの子をさ一夜ひとよも

率い寝ねてむ時したや家いへにくださむ

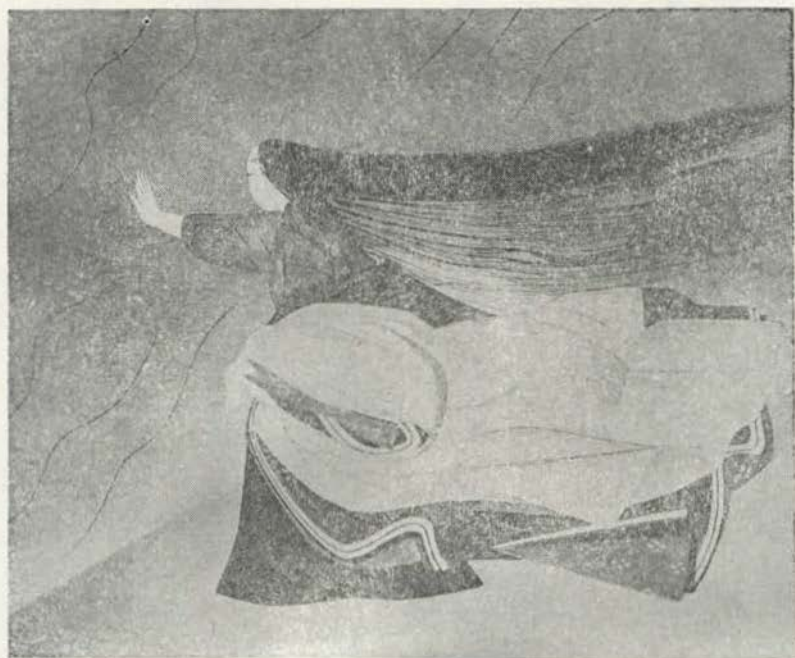
篠原村の若い娘をわずか一晚でも連れてきて、寝てくれれば、そのときは家に帰してあげるとの意である。大伴狭手彦おほてのきが朝鮮の任那みまなを救うため欽明天皇二十三年（五六二）八月、数万の日本軍を率いて朝鮮の高句麗こうくりを打ち破ったことがある。この狭手彦と弟日姫子おとひめことの恋物語である。狭手彦が松浦の港（現在の唐津港）を出て任那に向うとき、姫子は裾振峰すけふりのおね（現在の唐津の鏡山）に登って布を振って別れを惜しんだ。五日後に男が毎晩姫子のところに現れ、同床して明け方に帰っていくが、姿は狭手彦そっくりである。目印に男の衣服に糸をつけて、たどっていくとこの峰の上の沼であり、そこに寝ている蛇がいた。体は人間で沼に身を沈め、頭は蛇で岸辺に寝ていた。この歌を口ずさみ、一晚でも寝てくれたら家に帰してやるといったという。やがて篠原村の村人たちが姫子を探してこの沼に来てみると、沼の底に人骨があった。これが姫子の人骨であるとしてこの峰に葬ったという。

蛇は気味悪い動物であるので、万葉集をはじめ古歌には取材されなかった。しかし俳句は生活の詩であるので、人間生活に近い蛇は季題に採用された。芭蕉につぎの蛇の句があるが、季題は雉きである。

蛇へびくふときけばおそろし雉きの声

芭蕉

蛇は蛇の俗字、元禄三年（一六九〇）の芭蕉の吟である。芭蕉が弟子の酒堂しやどうあての書翰に蛇の句が二



——清姫（昭和5年・小林古徑適）——

句ある。酒堂は膳所（大津市）の医者であつた。芭蕉は草を艸とよく書く。

夏艸や我先達て蛇からむ 芭蕉
夏艸に富貴を飭（飾）れ蛇の衣 芭蕉

芭蕉

いずれも夏草が季題である。また寛政三年（一七九一）の俳諧撰集に蛇の句がある。

糸すゝき蛇に巻かれて寝まりけり

芭蕉

これは芒が季題である。

春になって冬眠していた蛇が地上に姿を現わすのを「蛇穴を出づ」と春の季題とする。蛇は穴から出て脱皮する。

けっこうな御世とや蛇も穴を出る

一茶

蛇が脱皮するのを「蛇衣いを脱ぐ」「蛇の衣きぬ」という夏の季題である。

御仏の膝の上なり蛇の衣

一茶

蛇の衣は金の溜るお守りとされてきた。

〔川柳〕抜け殻の蛇は簞笥に仕舞われる

忠太郎

秋になって涼しくなると蛇は穴に入って冬眠をする。このとき地方によっては数匹から数十匹もからみ合って冬眠する。これは暖をとるためである。「蛇穴に入る」が秋の季題であり、穴に入らない蛇を季題で「穴惑まどひ」という。

〔川蛇〕冬眠の蛇あわてさすブルドーザ

花子

仏典には竜はよく出てくるが蛇は少ない。薬師仏を守護する十二神将の因達羅大将いんだらは、本地は地藏菩薩であるが、頭上に蛇を置き、赤色にして左手に三鉈戟さんこげきを持っている。また仏典に蛇縄麻だじようまという言

葉がある。これは繩を蛇だと驚いたことも事実、蛇だと思ったのが朽ち繩であったことも真実、繩が麻でできていたことも事実、仮の姿と真実の姿の実体は何かという仏教教理を喩えた言葉である。

蛇は守護する神として祀られることがある。高松塚古墳壁画等に四神の古画があり、天皇即位式に使用されてきた四神旗に四神が飾られている。四神は青竜（東、青、春）、白虎（西、白、秋）、朱雀（南、赤、夏）、玄武（北、黒、冬）でそれぞれを守護する神である。玄武は亀に蛇が巻きついていてる形である。近年各地の七福神巡りがさかんになってきたが、その中の弁才天は蛇を神使とし祀られている。弁才天は銭洗い弁天のように施財の仏教神として信仰されるようになり、弁財天の呼称が多くなった。毎年最初の巳の日を初巳^{はつみ}といい、初弁天とも称し、正月の季節である。もとは音楽、芸術、弁舌の神であったが、財宝を施す神としての信仰が高まってきた。

〔川柳〕あるったけの銭を洗ふや初巳なる

中尾優里

日本三弁天は、鎌倉の江の島弁天、琵琶湖の竹生島弁天、広島^{いづみ}の厳島弁天である。竹生島弁天を勧請した江東区の冬木弁天は、江戸初期からの材木豪商、冬木弥平次の弁天であった。弁財天神使の白蛇がいたが、現在は蛇のいた洞が残っている。弁財天は池、沼、川などに祀られていることが多い。冬木弁天には関東大震災まで大きな池があった。放生池でもあるので魚が放たれ、だれもこれを捕らないから、ウナギなどが沢山すんでいた。この霊池^{れいち}のウナギを捕えて一ともうけしようとした男が、夜の間に道具を仕かけて捕えた。おびただしいウナギが捕れて、何杯もの大ざるに入れて夜の明ける



— 男女道成寺 (国延画) —

のを待った。みつからないうちに運び出そうとして、そのざるの蓋を開けると昨夜のウナギが全部蛇の姿に変わっているのに驚き失神した話は江戸時代のこと。

蛇の伝説で有名なのは娘道成寺である。安珍、清姫の説話を脚色した能楽「道成寺」が元である。これを京鹿子娘道成寺として藤本斗文が歌舞伎化し、宝暦三年（一七五三）中村座において一世中村富十郎が初演し、長唄舞踊の代表的な傑作として現在もしばしば上演されている。これは女性の執念を追求し、綱渡り、宙吊りなどの曲芸的要素も加え、江戸初期から代表的歌舞伎であった。

奥州白河の山伏、安珍が紀州熊野権現参詣の途中、紀州牟婁の庄司の家に泊ったとき、その娘清姫に奥州に連れていくと夫婦約束をした。安珍はその場を逃げるためにいったが、清姫は安珍のあとを必死に追いかけて、日高川では清姫は首から蛇体となって追いかけた。安珍はあまりの恐ろしさに、近くの道成寺の鐘の中にかくまってもらった。これを知った清姫は、美しい白拍子となって鐘に近づき、鐘の中に飛び込むと鐘は高音をたてて落下した。鐘を吊り上げると蛇が現われ、猛火を吹きかけながら、寺の前の日高川に飛び込んで身を沈め、鐘の下には安珍の灰が残っていたという説話である。昭和五年この清姫を画いた小林古径の名作で知られている。

〔川柳〕 暖かい日を白蛇に逢うほこら

愚亭

インドなどではコブラの毒蛇を笛で踊らす大道芸があり、ニシキ蛇などを女体にからませるヌードショウなどもある。

「川柳」倅せな蛇はヌードの腰を這い

扇啄坊

郷土玩具の蛇は少ない。大山（神奈川県）では竹の蛇が有名、尾を持つところによると動く。古代インドでは雌雄二匹の蛇のからまっているのがあるが、これは性愛を現わしたものである。蛇の目は加藤清正の紋所として知られている。蛇の目傘は元禄時代から流行し、傘の回りを丸く着色したものである。

刊＝

『江戸物語』 細田隆善（豊明）著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

新

●四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
●定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

評

▲発行・発売▼ ノンブル社

＝好

東京都新宿区新小川町六一三九—七〇一
電話（〇三）二六九—一二九三 二六七—六六三七
振替（東京）七一〇九三／千一六二

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(8)—

木きの下した隆りゅう一いち

春の宵であつた。四月半ばの八時半頃であつたかと思う。妙に生暖かい夜であつた。突然、ハチの吠え声が辺りに響いた。ワンというよりはグワンと聞こえる、肚にズンとこたえる声であつた。思わず耳を敲たたてて立ち上がったほど、その声には迫力があつた。そして連続して四、五回吠えると、猛烈な勢いで家の前の坂道を駆け下りて行つた。とても跛を引いてヒョコタンヒョコタン歩いてゐる犬の所業とは思えなかつた。

「何かあつたのかなあ」

と、珍しくその時間家にいた父に言うと、

「只事じゃなさそうだな」

と父は答えたものの、皆目見当はついていないようであった。しかしその夜のハチの行動は、人心を不安に陥れる要素を多分に含んでいた。

ハチが吠えたのはその時だけで、あとは元の生暖かい春の静けさに戻った。それが一層不気味だった。あの頃（昭和二十二年当時）は夜になると人工的な音はぼったり途絶え、静寂そのものであった。道が暗かったせいもあるが、夜に入ると人もあまり出歩かなかったし、自動車も殆ど走っていないかった。時折聞こえてくる山陽本線の列車の通過音が、唯一の人工的な音であったように思う。通過音の長短によって、旅客列車と貨物列車の識別が出来たし、貨物列車の場合は音の軽重によって上り下りの区別も可能で、九州方面から石炭を運ぶ上り列車は、五十両もの無蓋貨車に石炭を満載していたから、その響きはいかにも重そうであった。

しばらくして、男が二人訪ねて来た。父とは顔見知りの三原署の刑事で、咄嗟に父は工場の関係者に事故があったのではと顔を強ばらせたが、年輩の刑事はもう一人の若い刑事を紹介した後で、

「ハチが吠えたので、何かあったんじゃないかと思ひましてね」

と言った。

「確かにハチは先程吠えながら前の道を下りて行きましたが、貴方、それをどこでお聞きになった？」

父の問いに、

「署におりましたよ、宿直ですから」

と、刑事はむしろ怪訝な面持ちで答えた。

「署まで聞こえるですって……信じられませんか」

これは父の言う通りで、三原署は以前私達が止宿していた城見館の隣にあって、直線距離にすれば三百メートルそこそこだったが、いくら静かだからと言っても、これだけ離れたところから吠えた犬の音が、刑事の耳に届いたとはちょっと信じられなかった。

「どうしてハチの声と分かったんですか」

と私が聞くと、

「なあに、あんな底力のある声で吠える犬は、三原広しといえどもハチしかいない、なあ」

と、同意を求めるように若い刑事を振り返った。

「それに、この堀川の地形が漏斗状になっているから、メガホンの役目を果たしているんですよ。つまりここで吠えると、山に当たって共鳴して、意外に大きな音量で跳ね返って私等に聞こえるんですね、ハチの声もここで聞くのより大きいかもしれませんよ」

刑事の説明には半信半疑だったが、刑事とは漏斗状などと難しい言葉を使うものだと、私はむしろその方に興味を覚えた。ジョウゴと言えればいいものを、メガホンと言えれば分かりますが早いのに、調書というのこんな調子で難解な語を駆使して書くのかな、とふと思ったのである。

「お宅がこちらへ来られる前に、東町でタタキ、つまり強盗事件がありました、ホシつまり犯人は山伝いにこちらへ逃げたんですわ」

警察用語というか隠語というか独特の語に、一々刑事は註釈をつけて話し始めた。

「やはり今晚のようにハチが吠えたんですが、我々がハチが吠えるということの重大さを感知してなかったものですから、その時は取り逃がしてしまいました。後に別件で挙げたホシが東町の件をゲロした、つまり自白した際、堀川町の辺りで大きな犬に吠えられて、殺られるかと思つたと言つたんで、それからというもの、ハチが吠えたら要注意ということになりましたね」

「あの犬がねえ……」

と、父は絶句したが、私も同感であつた。ハチは町の人達の間では有名な犬だったが、警察にまでその名が鳴り響いていたとは……。

「何事もなければいいんですが、ま戸締まりだけは嚴重にお願いします」

そう言つて、二人の刑事は帰つて行つた。

手を突っ込めばすぐに開けられるが、戸締まりを嚴重にするとするかと、私が表の格子戸の差し込み錠を閉めに出て行き、何気なく教会の石段を見上げると、折から城山の上に現れた十七夜の朧月が、佇立しているハチの姿を照らし出していた。ハチがこの時ほど大きく見えたことはなかつた。

「ハチ、何があつたんだ、いつ帰つて来たんだ」

と言いながら私が上がって行くと、ハチは私を一瞥しただけで視線を元に戻すと、一点を凝視して微動だにせず、私の呼びかけには一切応じなかった。その目は赤く燃えていた。この件に関する後日談は全くないが、何事かが起こりかけていたのを、ハチが未然に防いだのだと、今でも私は思っている。ハチが吠えるのを聞いたのは、その時が最初で最後だった。

いつかハチは毎日のように我が家に来るようになっていたが、格子戸に施錠するようになってからは鼻で開けて入ることが出来ず、格子戸の前に寝そべって、誰かが起きてくるのを待っていた。「ハチや、お早よう」そんなことを言いながら、大抵は母が開けてやっていたが、大きな欠伸をして立ち上がると、尻を立ててククッと伸びをし、挨拶代りにパタパタと尻尾を振って入ってくるのが常だった。そして台所口に坐って食べ物が出るのを待つのであるが、決して敷居を跨いで中に入ることはなかった。その点は分を弁えた犬であつたと言える。

梅雨に入る前だったか、梅雨が明けてからだったか忘れたが、ある朝、表でカリカリと妙な音がするので、茶の間のガラス戸越しに覗いてみると、ハチは腹這いになって、格子戸の一番下の縦の棧を齧っていた。すでに二本は完全に折られていて、辺りに木屑と化した棧が散乱しあいた。急いで戸を開けて「こら、ハチ！」と怒鳴ると、上目づかいに私を見上げたが、棧を噛むことはやめようとはしなかった。固い鯛の頭骨を噛み砕くハチの歯をもってすれば、風雨に晒されて脆くなった格子戸の棧などは物の数ではなかったに違い

ないが、これは困ったことになったぞと思った。母はともかくとしても、父は怒るだろうなと思ったのである。

しかし、事は容易に運んだ。

「いつかはやるんじゃないかと思っていたが、とうとうやったか。錠をして開かなくしたのを腹に据えかねて……といったところだろう」

と、起きて来た父は怒りもせず、ハチの作業を眺めていた。

「通いの番犬を飼ったと思えばいいじゃないか。それも警察のお墨付きの奴をな」

父とそんな話をしていうるちに、三本目を噛み切ると、ハチは首を突っ込んで大きさを確かめ、充分体が入ると分かると、今度は取り切れなかったささらになった部分を丹念に噛み始めた。少し噛んでは鼻で嗅いで確かめ、また少し齧っては同じ動作を繰り返して、ハチは飽くことを知らない様子だった。なぜ目で確かめないで鼻で確かめるのか不思議でならなかったが、この謎は解明されないまま現在に至っあいる。

「あれ、お前取ってやれ。瘤癰起こして横の棧まで齧られたらばらばらになって、收拾がつかなくなってしまう」

結局最後は私の仕事になって鋸を持ち出さなくてはならなくなったが、口うるさい現場監督のように鼻を突っ込んで妨害するので、危なくてしょうがなかった。ハチにしてみれば自分の仕事を横取りされたような気がしたのかもしれない。

「警察のお墨付きかなんか知らんが、あんまり人に迷惑かけるんじゃないぞ」

ぶつぶつ言いながらも、やはり可愛いから腹や頭を怪我しないように、丁寧に紙鏝をかけて仕上げてやった。

「これでどうだ、気に入ったか。潜ってみろ、ほら」

それでもまだハチは不満があるのか、紙鏝をかけたところをさんざん嗅ぎ廻った挙句、やっと入って来た。

通いの番犬は、その夏は殆ど毎日一日中私の家で暮らしていた。そうして犬の習性について、実にいろいろのことを私に教えてくれたのである。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』正月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

法 然 上 人 鑽 仰 会

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生 涯 (一)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

故郷^{ふるさと}にて

私は、

— なるほど。

と、思った。

川にかかるその橋からの風景を見まわして、

川は西方から流れてきて、その橋を過ぎた

ところで大きく南に向きをかえるのだが、右岸の山麓に、神社があった。祭神は天照大神である。神社の名を、伊野皇大神宮と言った。ただし橋から鳥居は見えても、社そのものは見えない。高みにあるからである。見えるのは山肌を覆う杉の大木の、こんもりとした森だけである。

私が「なるほど」と思ったのは、橋からの眺望のあたえる印象が、伊勢の宇治山田を流れる五十鈴川から眺めた内宮の印象と、通じるものがあつたからである。

氏子たちは眺望の類似から、皇大神宮の分祀を請願したのであろうか。

それとも、皇大神宮を請願することとなつたのち、類似の地形を求めたのであろうか。そういえば、地名にも同じ文字が使われていた。

川の名を、いまは猪野川というが、かつて

は五十鈴川と呼んだ。

それだけではない。このあたり、現在は福岡県粕屋郡久山町となっているが、旧名は糟屋郡山田村大字猪野なのである。福岡市の東北に接する農村だが、この村名の山田はみごとに、本宮の所在する宇治山田の「山田」に通じていた。

筆者がここを訪れたのは、この物語の主人公である、

——大僧正願上人智海大和尚の、少年時代を知るためであつた。

もっともそうはいっても、年配の人とはともかく、今の若い人はこの大僧正について、ほとんど知るところがないかもしれない。

岩井智海は昭和九年初めから十二年末まで、浄土門主にして知恩院第八十世門跡だった人だが、この上人には一つの特徴があつた。それは、学問の功績いちじるしい学僧というの

でもなく、また、特別に行に打ち込んだというわけでもなく、じつは天才的な説法——といつても、努力の結晶にはかならないのだが——その説法一つで、全国の多くの人びとを念仏の門に導き、かつまたしつかりと阿弥陀仏に結びつけた、布教師出身というところにあった。そういう意味ではこの大僧正は、いつも第一線に立って大衆と接触することできいきと生命を輝かせた、もっとも和尚らしい和尚なのであった。

その智海大僧正の生れたのが、この、山田村大字猪野だったのである。

私をここへつれてきてくれたのは、大阪府堺市にある旭蓮社住職の山田智旭師だった。旭蓮社はまたの名を大阿弥陀経寺とよぶ。大僧正の最後の「自坊」となったところである。山田さんは智海大僧正のお弟子であるが、じつは縁つづきでもあった。山田さんの母が、

智海大僧正の姪ひななのである。

猪野にはいまでも、智海大僧正の縁家が数軒、かたまつて存在していて、いずれも安河内姓を名のつていた。

大僧正の生家もまたその一族で、父を、安河内市三郎といった。市三郎は富永ハルと婚姻し、ハルは三人の男子をなした。長男を辰吉ことの中に市治郎、次男が岩吉、末弟は長太郎ことのちの市兵衛である。

市治郎は長じて小川家へ養子にゆき、岩吉は出家し、結局、安河内を継いだのは、末弟の市兵衛であった。いまでも猪野に居をおく安河内一族は、おおむねこの三男の末裔まつぎである。もっとも市兵衛の実子である一男一女は早世したから、小川市治郎の次女サトとその夫・源次郎が、叔父・市兵衛の夫婦養子となつて安河内をついだのだが。

そしていうまでもなく次男岩吉が、智海大

僧正となったその人である。「岩井」姓はのちに述べるごとく、得度したときの師僧の姓である。彼は養子となって僧籍を得たのであった。

私が猪野を訪れたのは、ちょうど山田氏の実兄・只松鉄雄氏夫人田鶴子の十三回忌法要の日でめった。というよりもむしろ、山田さんの心くぼりで、親族の集まるその日が、取材の日に選ばれたのだといったほうがいいかもしれない。

着いた時間のせいで、私はさっそく昼のお斎の席に招かれた。

会席の膳のそとに、この家の主婦が心をこめて調理した一つの汁椀がついていた。ダブと呼ぶ郷土料理であった。

ひと口すすって、私はそのコクのあるうま味に感心した。そしてグを箸でつまむにおよんで、私はさらにおどろいた。かしわのぶっ

切り、大根、にんじん、ごぼう、椎茸、竹の子、はるさめ、蓮根——じつにいろいろなものが入っていたからである。

聞けば、何と何を入れるという定めはなく、季節のものならすべてグにしていいのだという。

「それぞれの持ち味がでて、よか味がついておりましようがな」

基調はかしわだが、なるほどこれでは「よか味」がでて不思議はない。

「法事はむろんのこと、およそ人の集る席には欠かせぬ料理ですたい」

「何というのですか」

「ダブと申しておりますな。椀のなかで汁がだぶだぶしとるからダブじゃと、聞いたことがありますたい」

これほど素直な名をもつ料理も少ないであろうと思ひながら、私は少年岩吉が、大人た

ちの催す集りごとを待ち兼ねるようにして、このダブに舌づつみを打つ姿を想像したりした。

箸をおいてしばらくして、参列の男性はみなうち揃い、猪野に残る大僧正ゆかりの場所へと案内して下すった。

皇大神宮は、そのしよっぱなだったのである。

時雨が、降ってはやみ、していた。五十鈴川の上流は霞がかかったようにけむっており、時雨がまさにあたりの風光に情をそえているのであった。

社は、中腹というには低すぎるが、ともかくも山の高みにあった。その階にかろうとするおどり場の左側に、村の鎮守にしては規模の大きな、どこか学校の体育館にも似た建

て物があつた。

「千人館ですたい。千人詣でちゅう福岡の講の休憩所ですたい。今でも三月四日には福岡から仰山の参詣客がみえるが、ほれ、昔は草鞋ばきでしよがな。参詣が終わるところでその草鞋のひもを締め直して……」

要するに、伊野皇大神宮は単なる鎮守ではなかつた。福岡にも多数の信仰者を持つていたのである。このあと、私は石の階段を上がつて拝殿に到つたのだが、その拝殿正面に頭山満の『雲從龍』なる扁額が掲げられているのを見て、いかにもそのことが知れた。頭山満はよかれあしかれ、明治・大正・昭和前期の三代にわたつて、隠然としつつも日本の政治に強烈なインパクトを与えた右翼の巨頭であるが、彼もまたこの皇大宮神の信者として、草鞋ばきでしばしばここに参詣した一人だったのである。

「——それで大僧正は、この神宮に滝を寄進されたですたい。わざわざ大勢の参詣客が、福岡からてくてく歩いて見えるんじやから、すこしでもその心持ちを慰やさずばなるまいと……」

階段を約三分の一ほど登った右側に、その滝があった。もとはただの小川が、細々と流れていただけだったという。そこに大小もろもろの石を運び、積み、落差をつけ、川幅をやや広げて、ささやかながら風情のある滝を築造したのである。

滝は、「岩井の滝」と名づけられた。しかし今はその由緒を伝えるものは、立札はむろんのこと、何もない。

それはともかく、この築造に智海大僧正は二千元を寄付したのだった。昭和十一年初秋のことだが、そのころの二千元は、ちょっとした借家が二軒建つほどの値打ちをもっていた。

た。

皇大神宮に参拝したあと、私は一行に、公会堂へ案内された。

おそらく百畳敷きはあろうかと思われる広さで、正面に、大僧正の染筆になる「旭之心」という大きな額が懸かっていた。「旭の心」は彼が昭和九年の師走に刊行した法話集の題名である。朝日のように堂々と、すがすがしい心持ちで一日を過ごそうではないか、という寓意があり、大僧正はこの時期、好んでこの言葉を使っていた。

鴨居には、もう一つ、小さな額が懸かっていた。猪野区公会堂建築費として岩井大僧正より一金二千六百円也を贈られたことにたいする感謝状であった。ここもまた、彼の寄進によるものだったのである。日づけは昭和十二年三月一日となっていた。

大僧正の郷里にたいする寄進は、それだけ

にとどまるものではなかった。

山田小学校にも「御真影奉安殿」の建設費として、また安河内家の菩薩寺である山田の六通寺にも、それぞれ二千円を寄進しているのである。

もっとも、この「御真影奉安殿」については、今となつては多少の解説がいるかもしれない。

戦前の日本では、各学校に宮内庁から天皇・皇后の写真が貸与されていて、祝日などには全校生徒を前に校長が「教育勅語」を奉読して生徒に聞かせるとともに、この「御真影」に礼拝することがきまりとなつていた。おそらく条例か、文部省通達によつたものであつたろうと思う。もし学校が火災の難に遭い、万が一にも「御真影」を焼失するようなことでもあれば一大事で、校長はまさに「切腹もの」といわれ、依願退職はおろか、自決する

人も少なくはなかつた。天皇が「現人神」であつた社会の、凄絶とても表現するしかない現象であるが、それで各学校では、火災に遭つても類焼の恐れのない校庭の一角に、「御真影奉安殿」を建設する風があつたのである。むろんその費用など正規の予算になく、多くは父兄の負担で賄われたのだったが、山田小学校の場合は、大僧正の寄付に拠つた、ということであらう。

それにしても、二千円は多すぎる。全額を注ぎ込めば、それこそ講堂のような奉安殿が出現したにちがいない。

調べてみると、智海大僧正は何に限らず寄付ごとは、二千円を標準としていたらしいふしがある。

安河内一族の菩提寺である、山田地区（旧山田村宇山田）の六通寺に寄進した額も、二千円であつた。

「中外日報」という、宗教界の消息を伝えてくれる新聞がある。いまでは押しも押されもせぬ専門紙の老舗であるが、戦前、まだ経営基盤の定まらない時期、創業社主の真溪涙骨氏は社員の給与も払いかねて四苦八苦したことがあったらしい。それを伝え聞いてひそかに智海大僧正が贈った金額も、ご他聞にもれず二千元であった。

私はこの挿話を、智海大僧正が遷化された直後の昭和十七年六月に刊行された『鈴泉遺芳』の巻頭に、真溪氏が寄せた、

——「旧友としての岩井智海師と私」

という一文によって知った。この「鈴泉」は岩井智海の雅号で、先にしるした、伊野皇大神宮の前を流れる五十鈴川にちなんだものだが、真溪氏が『我が過ぐる四十六年の歴史中には斯る秘められたる感激の一頁がある』として筆をとったこの文章には、人間智海の

一面を見事に伝えているところがあるので、その部分を採録しておくことにしよう。（原文のまま）

『或る年の暮、私は何時も経営難に苦み通して、その頃の社と今日の社とは大分内容実力も異なっているが、僅少なる年末のボーナスや月給の一部が支払はれなくて大いに苦悩に沈んでゐた時、或る日の朝、私の卓上に古新聞にクルクルと無造作に包まれた一封が置かれてある、ピンと私の第六感に響くものがあつて取る手をそしと開披すれば百圓拾圓五圓の各種紙幣を取まぜて貳千圓という大金が現はれた、私は恰も電氣に打たれたるが如く感激のあまり、全身硬直して唯だぼとくくと落ちる熱涙に洋服のズボン濡らした。

中に短かい一文が添へられてあった。それには同情溢るゝ言葉で、

貴兄も長い年月、この難事業の経営に悩まされ甚だ御苦労千萬である、この金は全く自分の私財で最も清く美しいものである、どうか遠慮なく使つて下さい、便利のためにもと思ひ各種の紙幣に換えて置きました、佛の慈光の中に同棲する兄弟は苦楽一如の同體であります。

との意味が認められてあった。微に入り細に徹する温かい友情、大旱の下、慈雨を注げる熱き親切、私は殆んど手の舞ひ、足の踏むところを忘れて歡び、即時右から左へ之を社中に分給して珍らしい気楽な年の瀬を過ごさせて貰った。そして私は直に知恩院の奥深く馳せ参じて親しく膝下に伏し泣いて廣大無邊の恩寵を謝し、

聲涙共に下り主客相擁して魂の交流を感じた一幕を演じた。』

この挿話自体、まさに一篇の佳話であるのだが、私がとくにひかれたのは、真溪氏が「微に入り細に徹する温かい友情」と書いてある、その点においてであった。

というのも、岩井智海はスケールの大きい、いわゆるハラもすわった人物であったが、しかしただ大きいだけではなく、事を行うにあつては細心をきわめるといふのが、その生涯に見られる一特色であつたからである。

それは、六通寺にたいする寄進にも見られる。

彼は菩提寺に寄贈したこの大金に、「特種法要費」という条件をつけていた。特種法要とは、五重受戒会法要を指す。これを貫徹するため、一族に「智海上人親族社会奉仕団」

なるものをつくらせ、奉仕団の側から親族代

表、寺側からは住職と檀徒総代、それに立会

人を加えて、施行細則のようなものが昭和十

二年に作られているのだが、それには、

——六通寺において必ず七年目ごとに五重
会を開催すること、奉仕団はそのつど三
百五十円を寄贈し入行者からは入行料を
いっさい受けぬこと、六通寺の組寺院で
五重受戒会が執行されるに際しては、奉
仕団から一ヶ寺二十円以内を寄贈するこ
と。

などが決められており、興味深いのはその
三百五十円の内訳までが、

『金百十円

教師法礼

金百三十円

入行者六日間接招費

金百円

血脈本堂香花料取持

寺院並ニ台所手当等

一切ノ費用』

と明記されていることである。

これらの取り決めに、智海大僧正が加わっ
たという証拠は、当然ながらどこにもない。
しかし全文を通読してみると、当代の名授戒
師であつたその見識がはっきりと伝わってき
て、私はそこに「細に徹した」一つの例を見
ないわけにはゆかない。

もっともこう書いてくると、智海大僧正そ
の人がいかにも分析的で、理に徹した人のよ
うに思えてくるかもしれないが、じつはそう
ではなく、それらの行為の基調をなすのは、
いみじくも真溪氏が書いているように、人間
的な温かさであつた。彼が近代まれに見る多
くの信者から慕われる僧となつた理由の一つ
は、これにあつた。

それにしても、智海大僧正はよく財を散ず

る人であった。もちろん、自分一個の楽しみのためでないことは、すでに見てきた通りである。ときには、才能ある若者の学費や生活費を授助したりもしているのだ。

もっともそれらの資金源ともいうべき「本業」の方の多忙さも、みごとにたものである。

山田師が編集し、大僧正の死に先立つ二年前の昭和十五年に刊行した『道しるべ』には、明治三十四年から昭和十一年までの三十六年間にわたる、「五重授戒結縁寺院及結縁年月日」が記録されているが、数えてみるとそれはなんと四百九十三にもおよんでいる。

平均すると年に一三・七回となるが、もっともこれは余り意味がない。山田師自身も注書きで「参考」と断っているように、これはたまたま智海上人の手元にあった「血誓帳」のみによって記録されたもので、『遺漏もとより多からん』とするされているからである。

それはともかく、手近なところで昭和十一年の項を見ると、智海上人は当時すでに知恩院門跡の座に昇っていたのだが、その五月にはなんと結縁が二十三回にもおよんでいるのだ。もちろん地域的に近接した寺院ばかりだが、おそらく数ヶ寺を掛け持ちして車で駆けめぐるといふ早業を演じなければならなかったであろう。今のうちに「渋滞」という言葉のなかった時代だからできたことである。いや、それとも開白日だけの巡錫だったのだろうか。

公会堂をでると、一時、小やみとなっていた時雨が、またばらついてきた。

案内してくださった一行のなかの小川万吉さんが、旧山田村について、語る。

「猪野は木でもつ、木は山でもつ、山田上

下で米をもつ」という俗謡が、ひと昔まえのこのあたりの特長を、一番よう言い表わしとりますたい」

山田上下とは上山田、下山田という水田地帯をかかえる大字のことで、木とは、

「杉ですたい。何十年前には盆と正月に、十万二十万という金をわけておった」

「植林ですか。なかなか裕福な村じゃありませんか」

「それが今では採算が合わんようになって、猪野の材木業も下火になってしもうた」

「大僧正は文久三年五月二十七日（一八六三年）の生れですよ。その当時はどうだったんですか」

山田さんがその問いかけを引き取った。

「村のことはよう知らんですが、安河内は貧しかったらしい。貧乏だということは、師匠が自分でもいうとりましたから」

「ひどかったのですか」

「相当のものだったらしい。学校へ弁当も持って行けなくて、空弁当を持参して、それを空ではないように友だちに思わせるのに苦労してはったと、村の人が語っておいしましたね。村では伝説のようになっておった」

岩井智海は人柄としては明るい人だったが、しかし少年時代の話に明るいものは何もなかった。焼き芋を八厘買って、一日の飢えをしのいだという話と、この空弁当の一件が、彼の少年時代を伝えて残っているたった二つの挿話なのだった。

これでは岩吉少年は、このあたりの人が食べる機会のくるのをひどく楽しみにしていたというダブを口にすることも、めったになかったのではないか。

私は、感慨無量であった。

じつをいうと、血こそつながってはいなか

つたが、私もまた遠い縁ながら、岩井智海に
つながる縁辺の一人なのであった。父の姉が、
この僧正の二度目の妻として、嫁いでいたか
らである。結婚を熱望したのは私の伯母の方
で、ほとんど押しかけ女房のようだったと母
から聞いた記憶があるが、しかし伯母はまも
なく病没し、その薄幸の人生を、愛した人の
もとで閉じた。

その縁で私も、ほとんど名目だけのような
ものだったが、智海上人の法弟の端くれに名
を連ねさせてもらった一時期もあった。

そして私の自坊には、私の母方の義伯父に
あたる先代が、智海大僧正から頂戴した緋の
衣があるのだった。先代はこれを着て祖山・
知恩院で唱讃導師を勤めたことがあるが、私
は折にふれてこの緋の衣を虫干しさせながら、
二人を思うことがしばしばあった。

私の知る智海大僧正は、旭日のように昇天

の過程にある「高僧」の姿以外のなにもので
もなかった。おしなべて日本全体がひどく貧
しかった時代とはいえ、その人の少年時代が、
空弁当と芋八厘で語られようとは、思っても
いなかった。

なぜ、そんなに貧しかったのか。

私は山田さんに、だんだんと話を聞いた。
それには一つの原因が、あった。

(つづく)

◎「維持会員」への

ご加入のお願い!!

年会費金二万円のご助成をもって、弊
会の維持会員として月刊誌『浄土』刊
行に暖かいご支授を賜わりたく、宜し
くお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

謹賀新年

埼玉工業大学 松川 文豪	淑徳中学校校長 淑徳高等学校校長 里見 達人	鎮西学園理事長 鎮西高等学校校長 真和中学高等学校校長 上田 祐規 〒362 熊本市九品寺三一四一 電話 三六四一八一七六	東山学園 学園長 石井俊恭 常任理事 山崎宏賢 西出澄弘
上宮学園 理事長・学園長 鵜飼隆玄 高等学校校長 鵜飼光順 〒513 大阪市天王寺区上之宮町三一六	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄 〒243 鎌倉市長谷四一二二八 電話 (〇四六七)二二一〇七〇三	法然上人御降誕地廿五霊場第一番 中国三十三観音特別霊場 誕生寺 岡山県久米郡久米南町里方 電話(〇八六七)二八一二〇二	浄土宗宗務総長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)二三一四〇〇〇
寺内大吉	大原山 西福寺 鵜飼隆玄	萩市 常念寺 老隠 古本超然	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二一二四一八

新年賀謹

龍泉寺住職 伊東康雄 〒107 東京都港区南青山二一八一二五	大本山光明寺執事長 西念寺 北邨謙順 〒150 南足柄市沼田三一五 電話 ○四六五(七四)〇五八八	回向院住職 本多清敏 〒130 東京都墨田区両国二一八一〇	稻田稔界
おてらはみなさんの相談所 桜と観音さまのお寺 浄心寺 小池政雄	函館称名寺 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八一四	中島真哉 青山梅窓院 〒107 東京都港区南青山二二六二三八	教安寺住職 野呂幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六一二 電話(〇四四)二二二一四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一 清岸寺 原口徳正	松庵寺内無為窟主 小川金英 〒025 花巻市双葉町六一四 仏教福祉センターよるひる銀行	正覚寺住職 楠美知行 〒030 青森市本町一一一一二	サンガ真仏教舎本部長 大善寺住職 裏辻賢洲 〒811 福岡県宗像郡福岡町松原区

新年賀謹

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六	圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一二一四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二一三一八
昌清寺 住職 服部光順 前住職 服部仙順 〒113 東京都文京区本郷二一八一三	檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文 京都市左京区川端通三条上ル	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六一三九八 浄蓮寺	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二一四 電話(〇二八二)二二一〇八〇二	芳泉寺 なぎら しんじゅん 柳 楽真純 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七―四八	光明寺 白幡憲佑 〒232 横浜市内南区久保山	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟真寺 住職 立松 辨成 電話(〇五三二)五二一五五六六

新年賀謹

遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―一二―四七 廣隆寺内	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―一五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	九品仏浄真寺 清水順碩
お骨仏の寺 一心寺 貫主高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七一一〇四四四(代)	光運寺 飯田信弘 〒510 四日市市中部三―一二―	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四―一―三八	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐 〒425 焼津市東小川一丁目六―一	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町一―一―	法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。また、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の「コマ」や我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年十二月二十五日 印刷

昭和六十四年一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

謹賀新年

総本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

〒170
東京都豊島区西巣鴨三二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三一代表

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

〒603
京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一―二二四代表
通信教育部 四九一―〇二三九

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五一―三七

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 霊 法

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

京都文教短期大学

学長 大橋 俊 有

〒611 宇治市旗島町八〇